

臥竜遺跡

(第6次発掘調査)

貸店舗および共同住宅建設に
先立ち緊急発掘調査報告書



1996.3

長野県原村教育委員会

表紙地図10,000分の1 ○印が臥竜遺跡

序

本書は、貸店舗および共同住宅の建設に伴って、原村教育委員会で実施した緊急発掘調査の報告書です。

臥竜遺跡附近は、近年宅地化がすすみ、山林や畑であった土地に住宅が建設されるケースが増えてきました。こうした開発の流れの中で、どのような形で遺跡を保護していくかは、種々議論のあるところですが、長野県教育委員会文化課の指導を受けて、記録保存する運びとなりました。発掘調査の結果、発見された遺物は少なく、縄文時代中期の土器片1点が出土したのみでありましたが、遺跡外縁部にあたることは容易に想像できるものでありました。

今回の調査にあたり、ご理解とご協力をいただいた、地主の株式会社貸家アパートセンター、また発掘調査から報告書作成に至る過程でご指導ご協力を賜った長野県教育委員会をはじめ関係各位、寒い中発掘に携って下さった方々に心から謝意を表し、序と致します。

平成8年3月

原村教育委員会

教育長 大 舘 宏

例 言

- 1 本報告は貸店舗および共同住宅建設に先立って実施した、長野県諏訪郡原村払沢に所在する臥竜遺跡の緊急発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査は、株式会社諏訪貸家アパートセンターから委託をうけた原村教育委員会が、平成7年12月13日から28日にかけて実施した。整理作業は、平成8年1月4日から2月15日に行なった。
- 3 執筆および図面の作図とトレースは、平出一治と平林とし美が話合いのもとに行ない、写真撮影は平出が行なった。
- 4 本調査の出土遺物、記録等はすべて原村教育委員会で保管している。
なお、本調査関係の資料には、35の原村遺跡番号を表記した。

発掘調査から報告書作成にわたって、丸山徹一郎・小平和夫・原明芳・武藤雄六の諸氏に御指導・御助言をいただいた。厚く御礼申し上げる次第である

目 次

例 言	
目 次	
I は じ め に	1
II 発掘調査の経過	2
III 遺跡の位置と環境	2
IV 調査方法・状況・土層	4
V 発見した遺物	5
VI お わ り に	5
参 考 文 献	
報 告 書 抄 録	
発掘調査団名簿	

I はじめに

村内をはじめ隣接地域ではここ数年、宅地や工業団地の造成が盛んに行なわれるようになってきている。たまたま平成5年度に、弘沢の臥竜遺跡（原村遺跡番号35）に貸店舗および共同住宅の建設が計画されていることを知るところとなる。その保護については、長野県教育委員会文化課の指導を受けるなかで進めた。

遺跡は現状のまま保存していくのが最も望ましいが、公共施設である役場・小学校および中学校に近く、古くから宅地化が進んでいる地域で、記録保存やむなしと考える中で、関係者と協議を進め平成6年度に緊急発掘調査を計画した。

しかし、平成6年度に実施した県営圃場整備事業原村西部地区の緊急発掘調査は、当初の計画を上回り、新たに調査体制を整えることはできなかったこと、また、計画の途中で事業者が変わるなど、計画どおりに進まず緊急発掘調査を実施することはできなかった。

平成7年9月に関係者と協議と打合せを行ない、原村教育委員会は株式会社諏訪貸家アパートセンターから緊急発掘調査の委託をうけ、平成7年12月13日から28日にわたり、臥竜遺跡第6次緊急発掘調査を実施した。



臥竜遺跡（発掘地区）遠景

II 発掘調査の経過

平成7年12月13日 発掘準備をはじめめる。

22日 グリッド杭など機材の搬入を行なう。

25日 トレンチ設定を行ない、層位別にトレンチ発掘をはじめめる。耕作土の直下は礫包含の黒色土で、状態は良くない。トレンチ2から縄文土器破片1点が出土する。トレンチ1でタメを検出するが、精査は行なわない。

26日 引き続きトレンチ発掘を行なう。遺物の発見はない。

27日 グリッド杭、機材の片付けを行なう。

28日 片付けと図面の整理を行なう。

III 遺跡の位置と環境

臥竜遺跡（原村遺跡番号35）は、弘沢区東方の長野県諏訪郡原村5968-1付近に位置し、昭和57年3月10日に村の史跡に指定されている。

このあたりは八ヶ岳西麓のほぼ中央に位置し、裾野の2kmほど上から開析がはじまる大早川の右岸に発達した尾根上から緩やかな斜面に遺跡は立地している。標高は1050m前後を測り、地目は宅地、水田、普通畑、臥竜公園、墓地で、遺跡の保存状態は悪い所の方が多いようである。

調査地点は、緩やかな尾根の北西斜面であり、遺跡の北西外縁部にあたる。なお、村の史跡指定範囲からも外れている。地目は普通畑であるが、隣接する東方は圃場整備事業がすでに行なわれた水田と公園であり、北には宅地が隣接し、西は道路と普通畑である。

八ヶ岳西南麓一帯の尾根上には、縄文時代を中心とした遺跡が数多く埋蔵されている。この臥竜遺跡の周辺にも、第1図および表1に示したように大小様々の遺跡が分布している。原村における遺跡の高度限界ラインが標高1200m前後であることから、東方の遺跡数は少なくなっている。

隣接する遺跡に目を向けてみると、調査範囲がまだまだ狭く不明瞭な点が多く残されているが、大横道上遺跡（原村遺跡番号32）では縄文時代中期後葉と後期初頭の住居址、ワナバ遺跡（同33）で中期後葉の住居址、山の神上遺跡（同75）で後期初頭の住居址がそれぞれ発見されている。したがって、この辺りは縄文時代中期後葉から後期初頭におよぶ遺跡群が形成されている地域であることは確かなようである。

表1 臥竜遺跡と付近の遺跡一覧

○は遺物発見 ◎は住居跡発見

番号	遺跡名	旧石器	縄文			弥生	古墳	奈良	平安	中世	近世	備考
			草	早	前中後晩							
20	前尾根				◎ ◎						○	昭和44・52～53・59年度発掘調査
24	恩裏家		○		◎ ◎							昭和26年度詳細分布調査
25	尾根下				○							昭和59年度発掘調査、平成5年度立会い 昭和26年度発掘調査
26	家				○							
27	關宮				○							昭和50・54年度発掘調査
28	向尾根				○				○			
29	南尾根				○							昭和42・51年度発掘調査
30	中大ワ				○							
31	横ナ				◎ ◎							昭和13・35・36・45・57・平成3・7年度発掘調査
32	の木竜				◎ ◎							
33	枳				○							昭和154・57・63・平成4・5年度発掘調査 昭和157・58年度発掘調査 平成7年度発掘調査 昭和151年一部破壊、平成7年度発掘調査
34	臥				◎ ◎							
35	小弘				○							昭和154・57・63・平成4・5年度発掘調査 昭和157・58年度発掘調査 平成7年度発掘調査 昭和151年一部破壊、平成7年度発掘調査
36	雁頭				◎							
54	宮ノ下		○		○							昭和151年一部破壊、平成6・7年度発掘調査 昭和45・57年度発掘調査 平成4年度発掘調査、消滅
55	中尾根				◎ ◎							
56	家前尾根				◎ ◎							昭和151年一部破壊、平成6・7年度発掘調査 昭和45・57年度発掘調査 平成4年度発掘調査、消滅
57	久保地尾根				◎ ◎							
75	山の神上				○ ◎							昭和151年一部破壊、平成6・7年度発掘調査 昭和45・57年度発掘調査 平成4年度発掘調査、消滅
95	土井平				○ ◎							



第1図 臥竜遺跡と付近の遺跡 (1/20,000)

IV 調査方法・状況・土層

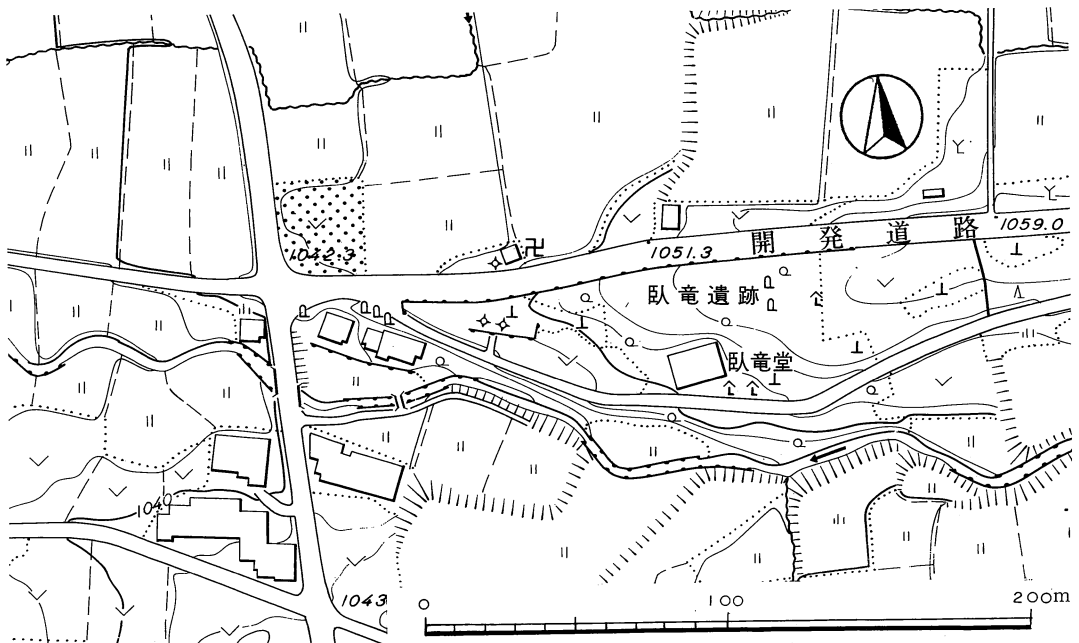
発掘に先立ち、南北（磁北）に軸を合わせた幅1m、長さ20mのトレンチを3箇所を設定し（トレンチ1は19mの調査）、便宜的に西からトレンチ1・トレンチ2・トレンチ3と呼称することにした。

発掘調査は、第3図のトレンチ配置図に示したように59㎡の平面発掘を層位別実施した。出土した遺物は縄文時代の土器破片1点と少なく、遺構を検出するまでにはいたっていない。

トレンチ1で礫を取り上げ、その下層の調査を行なったが、遺物の発見は皆無であり、トレンチ2とトレンチ3は礫上面までの調査である。礫の発見数は多く、一見集石とも思える状態の所もあったが、遺構として把握できるような規則性は一切認められなかった。

耕作土である第I層は黒褐色土で、小礫が数多く混じり地味は良くない。第II層は、握り拳大から子供の頭大の礫を包含する黒色土で、宅地に近いためか耕作によると思われる掘りかえしが著しく不安定であった。第III層は地山の礫混入のローム層である。なお、畑の隅には耕作の折りに掘り出されたとと思われる礫の山（ヤッカ）もみられた。

ちなみに礫までの深さは、トレンチ1で20～43cm、トレンチ2は21～30cm、トレンチ3は20～22cmを計り北側が深くなる。



第2図 臥竜遺跡発掘調査区域図・地形図 (1/2,500)

V 発見した遺物

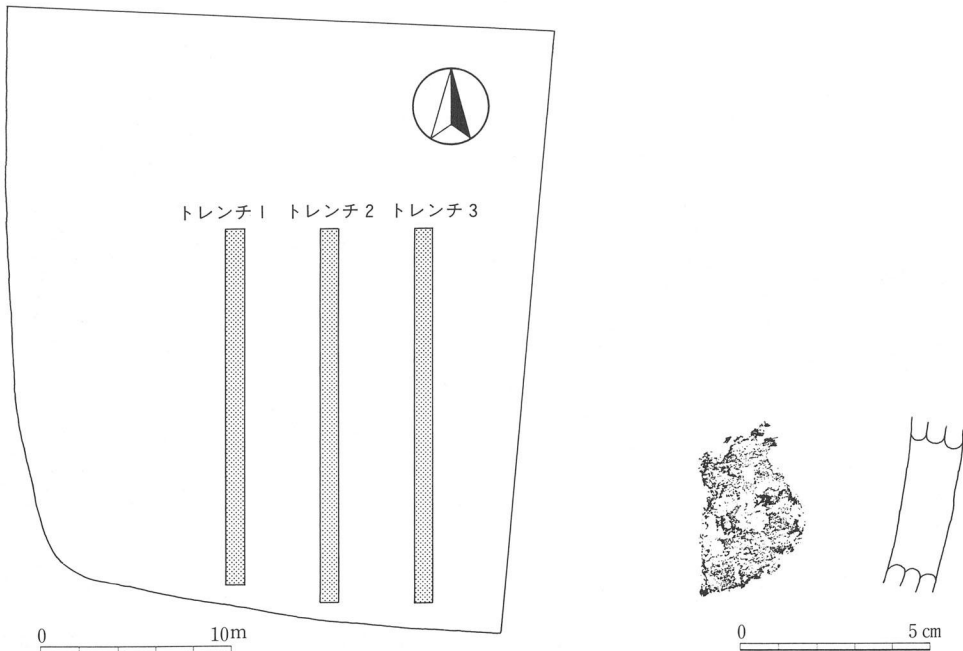
本調査で発見した遺物は少なく、トレンチ2から縄文時代中期の土器破片1点が出土しただけである。

第3図に示したように無文の小破片で、胎土および焼成は良好で硬い。無文土器であるため明確な帰属時期を示すことはできないが、胎土・整形および焼成からみて縄文時代中期後葉の曾利式土器であろう。

VI おわりに

本調査で発見した資料は縄文時代中期の土器破片1点と少なく、遺構を確認するまでにはいたらなかった。この事実が臥竜遺跡内における本調査地点の性格を物語っていることになるだろう。

臥竜遺跡は、5次にわたる発掘調査で、縄文時代中期の井戸尻期から曾利期におよぶ住居址8軒と、後期初頭の堀ノ内期の敷石住居址2軒が発見されていることから、中期中葉から後期初頭に営まれた中規模集落跡であることが明確になりつつある。しかし、本調査地点は、尾根先端部



第3図 トレンチ配置図 (1/400) と出土土器拓影 (1/2)

の緩やかな北斜面で、集落跡の外縁部にあたることは容易に想像できるものである。限られた狭い範囲の調査であったが、結果は土器破片1点だけの発見に終わり、遺跡外縁部における性格の一端を窺うことができたものと思っている。

最後に、関係者各位ならびに小雪がちらつく寒い日にもかかわらず発掘調査にたずさわった方々に厚く御礼申し上げる次第である。

参 考 文 献

- 1959 03 宮坂英弉「臥竜堂公園遺跡調査報告」(『原村公民館報』21)
1961 03 茅野高校地歴クラブ「臥竜遺跡発掘」(『石楠』13)
1962 03 宮坂孝雄「臥竜遺跡発掘」(『石楠』14)
03 宮坂英弉「長野県諏訪郡臥竜堂公園遺跡」(『日本考古学年報』11)
1966 03 宮坂英弉「長野県諏訪郡臥竜堂公園遺跡(第2次)」(『日本考古学年報』14)
1980 03 長野県教育委員会『昭和54年度 八ヶ岳西南麓遺跡群分布調査報告書』
1983 03 原村教育委員会・原村文化財調査委員会「村史跡 臥竜遺跡の竪穴式住居復原の記録」(『館報はら』114)
1985 07 原村役場『原村誌 上巻』

臥竜遺跡第6次発掘調査団名簿

団 長 大館 宏 (原村教育委員会教育長)
調査担当者 平出 一治
調 査 員 平林とし美
調査参加者 発掘作業 西沢 寛人 中村きみゑ 小林 ミサ 清水としみ
清水みち子 宮坂とし子 清水 正進 坂本ちづる
日達今朝江 津金喜美子 進藤 郁代
整理作業 津金喜美子 坂本ちづる 進藤郁代 (順不同)

事 務 局 原村教育委員会事務局

平成6年度 平林 太尾 (教育長) 平林今朝二 (教育次長)
大口美代子 (庶務係長) 宮坂 道彦 (主任)
伊藤 佳江 五味 一郎 (文化財係長) 平出 一治
平林とし美
平成7年度 大館 宏 (教育長) 平林今朝二 (教育次長)
大口美代子 (庶務係長) 宮坂 道彦 (主任)
伊藤 佳江 平出 一治 平林とし美 石川 美樹

報告書抄録

ふりがな	がりゅういせき							
書名	臥竜遺跡（第6次発掘調査）							
副書名	貸店舗および共同住宅建設に先立つ緊急発掘調査報告書							
巻次								
シリーズ名	原村の埋蔵文化財							
シリーズ番号	37							
編著者名	平出一治 平林とし美							
編集機関	原村教育委員会							
所在地	〒391-01 長野県諏訪郡原村6549番地1					TEL. 0266-79-2111		
発行年月日	西暦 1996年03月							
ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
		市町村	遺跡番号	度分秒	度分秒			
が 臥 りゅう 竜	ながのけんすわぐん 長野県諏訪郡 はらむらほらいざわ 原村 弘沢	3637	35	35度 57分 39秒	138度 13分 45秒	19951213 ～ 19951228	59	貸店舗および 共同住宅建設
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
が 臥 りゅう 竜	集落跡	縄文時代 中期			中期土器破片		縄文時代中期から後期の集落跡であるが、本調査地点は、遺跡の北西部で発見した遺物は1点と少なく、外縁部の性格の一端を窺うことができたといえよう。	

原村の埋蔵文化財37

臥竜遺跡 (第6次発掘調査)

貸店舗および共同住宅建設に
先立つ緊急発掘調査報告書

発行日 平成8年3月

発行 原村教育委員会
長野県諏訪郡原村

印刷所 日本ハイコム株式会社
塩尻市北小野 4724
TEL 0263-56-2111

